

木っ端役人

大田 義信

「狼藉者だ。出会えっ、出会えっ、引っ捕らえろ。」

悪代官に職務命令された事情を知らぬ木っ端役人が、屋敷への不法侵入者を拘束しようとして大勢、音を立てて殴られています。

薄型テレビは、時代劇の主人公（不法侵入者）のしたり顔を画面全体に拡大し、大衆は拍手喝采をしています。

「殴る相手を間違えてるよ。役人たちは一生懸命働いているだけ。何の罪もない人様の夫、父親に怪我させて格好つけるなよ。」

思わずデジタルテレビの架空のヒーローに説教を垂れて、自己嫌悪に塗

れている私は、学校事務をしているお役人、公務員です。

ある日、私は、学費未納で除籍になる学生の事務手続きを担当することになりました。

受験を突破し、何年も通った学校、早朝グラウンドで誰よりも号令を出して走っていた、たしかサッカー部の背番号十九番、丸坊主の選手です。

夕方五時までに学費を納めなければ学籍を失うこの子に最後の機会を与えようと勤務時間を過ぎても何度も私が電話を架け続けていると、係長に少し睨まれました。この学生が学校に残るとなると、事務的に業務量が増えてしまうため上司は宣います。

「何百人学生がいると思ってるんだ？全員にそんなことができるのか？。粛々と退学手続きを進めろ。」

ご指摘はごもつとも。役人の唯一の強みは上司に嫌われてもクビや減給にできないことです。ついでに出世もできなくなるでしょうけれど。

夜八時過ぎに、やっと学生と電話が繋がり、今日中に必ず学費を納めるから待ってくれと泣きつかれ、待機する約束をしました。

妻に遅くなると電話連絡すると敬語まじりの返事の後、切る前にため息をつかれました。

妻は私の夕食のことを尋ねませんでした。

私も長男の風邪の具合を聞くことを忘れてしまい、かけ直そうか迷いました。

夜十一時前、学生が叔父さんの運転する黒い外車でやって来ました。力士のような叔父さんは、金色の腕時計とブレスレットをジャラジャラさせて、いきなり机を叩きました。

「今日までしか受け付けないだど？。俺達は金を払う客だぞ。この学費のおかげでお前ら飯が食えてるんだろう？。まったく役人だ。」

叔父さんが、学費の入った封筒を机上に投げつけると、私のマグカップ

に当たり金属が擦れる音をたてて、深い傷をつけました。

学生は黙って自分の靴を見ていました。

やがて叔父さんは、「お客様の声」の張り紙に気づき帰り際に、投書箱を「ドン！」と叩いて何か紙を入れて出て行きました。

サービス残業しているのは私一人。電気を消して施錠、機械警備を作動させました。

帰路の空は星一つ残さず雲が覆い、道標や街灯はなく墨汁に潜ったようで、私の中古軽自動車が照らすヘッドライトの明かりだけを頼りに走りまわりました。私が就職したときに車の内張りに貼った紅いシールが、風化して今にも剥がれ落ちそうになっています。

自宅の玄関を開けると街灯が零れて長男が描いた、家族で行った海水浴の絵を照らしました。皆、手のひらが大きく描かれ、大きな口を開け、歯を全部見せて笑っています。

寢室の扉が少しだけ開いていて蛍光灯の薄い光が、妻の寢間着から伸びた、餅のように白い脚を浮かび上がらせています。

寢息を立てている長男の額と私の額をくつつけて、熱が下がったことを確認しました。小児用風邪薬の甘い臭いがしました。

布団からは婚約時代と変わらない、妻のシャワーコロンの香りがしました。枕に少し髪を持ち上げられた妻のうなじが見えます。

私は妻子側と壁側の交互に何度も寝返りを打ちました。

明日は、あの投書のおかげで、スーパーの店内コマーシャル放送のように繰り返す上司の叱咤を拝聴する仕事が待っています。

砂を噛まされるような不毛な時間です。

翌朝、出勤途中に運動場の側を歩いている

と昨日の学生と、すれ違いました。

学生は、私に一瞥もくれずにサッカーのユニホームを着て、数人のチー

ムメイトと運動場に跳んで行きました。

ゴールの側には黄金色のタンポポが一本背伸びをして咲いていました。

「沖縄の方言でナンクルミ（人の手によらず自分の力で自然に生育した植物）と言うんだ。こんなところに咲くなんて逞しいな。」学生は顎を天に向けて呟き、笑顔でサッカーを続けました。

野生の花は、偶然関わった土や日差しに育まれて咲けることに気づいていないようでした。

所々灰色の雲がぶら下がっている空には、朝焼けの深紅が、今にも消えそうに残っています。

（了）